

修士論文概要

青年期後期を迎えた二卵性双生児間の同胞意識についての研究 －関係性のタテとヨコの語りに着目して－

荒井 郁乃

1. 問題と目的

双生児には一卵性と二卵性がある。一卵性双生児は1個の受精卵に起源をもち、それが発生の途上において分離し、2つの個体になったものである。したがって一卵性の2人は遺伝学的には同じ個体で、かならず同性であるし外見的にもよく似ている。二卵性は同時にまたは相次いで排卵され、2つの卵母細胞が別々の精子によって受精され発育したものである。そのため二卵性の遺伝質の差異は同じ両親から生まれた普通の同胞の関係と同じで、二卵性の約半数は異性の組合せである。一卵性は遺伝子が同様とされていることから、二人の間に差異が見られるならそれは、環境的な働きである可能性が大きい。

きょうだい間の関係性について依田(1990)はきょうだい関係には上の子が下の子を指導や保護をしたり、下の子が上の子に甘えたりする親子関係に似た「タテ」の関係と、仲間関係に特徴的な「ヨコ」の関係が複合していると考え、きょうだい関係を「ナナメ」の関係と呼び、親子関係から友人関係への移行を仲立ちする役割を持つと考えた。「タテ」の関係は年齢差に伴う身体的・心理的な違い、優劣や上下なども入りやすいと言われている(磯崎、2019)。このように「きょうだい研究をまとめると、「タテ」「ヨコ」「ナナメ」の関係性が生じていると明らかにされている。一卵性双生児の研究を見るときょうだい関係に起きている「タテ」の関係が周囲からの扱いによって生まれていることや、「ヨコ」の関係の結び付きが強いことで自他の未分化が出来ないなどきょうだい関係とは異なる「ナナメ」の関係が存在していると予想される。

上記から双方の特徴を有すると思われる二

卵性双生児にも、きょうだい関係の「タテ」「ヨコ」の关系到類似した関係性が考えられる一方で、きょうだい関係とは異なる部分も存在していると予想される。また、先行研究で明らかにされている一卵性双生児の関係性とも類似している部分や異なる部分があると予想される。

二卵性双生児に焦点を当て、二卵性双生児の同胞意識について調査する。先行研究をふまえて、双生児双方にインタビューを行うことで双生児の相手に対する感覚などを明らかにし、二卵性双生児特有の同胞意識について調べることを目的とする。

2. 方法

(1) 対象者

青年期後期の二卵性双生児の双方から同意が取れた双生児4組。

(2) 期間

2023年8月から12月にかけて半構造化インタビューを実施。

(3) 手続き

対象者8名のうち3名と対面で行い、残り5名はZOOMによるオンライン形式で実施した。

3. 結果

本研究に参加した二卵性双生児の語りから同胞意識として「ナナメ」の関係について想定した結果、彼らはそれぞれが相手に抱く印象や周囲の評価により生じる「タテ」の関係性の変化に翻弄されながらも、お互いに相手を思い合い立場を譲るなど、対の相手と決定的な対立が起きないような関わり方を相互に工夫して関係を成り立たせている様子が確認

できた。「タテ」の関係の文脈では、出生順によって上なる場合や、能力によって上になる場合でも、下の立場を見守る感覚で関わるなど相手に対して心配を始めとした保護的な感覚の存在が語られた。

4. 考察

お互いに比較を行い劣等感が生まれるなどの葛藤が生じており、相手と頻繁に喧嘩をすることや関係性を揺るがすようなエピソードも語られているが、これらのどのエピソードにおいても最後は互いに自身の得意な分野を見出し、対の相手と競合しないあり方を選ぶ様子からも、対立を避けるための様々な方策をとっていたことが推察され、現在に至るまで関係性が崩れないようにお互いに配慮した関わり方をしていると考えられた。

また、こういった決定的な葛藤に至らない一つの要因として、進学などによる進む方向性の分岐や別居によって生じる双子の個別化も考えられた。どの双子も周囲から対の相手とのセットではなく個として扱われた体験や、得意なものを得ることにより、相手と違う選択を行った体験を語っており、環境や進路の別離は相手と自分の分離を促し、双方の関係に物理的な距離が生じることで対の相手に対する「ヨコ」の感覚の重要性を再確認させ、相手が自身を理解してくれる重要な存在であることや分身であると認識するに至る可能性が示唆された。

本研究の4組の二卵性双生児は現在も仲が良好であることが前提となっているが、彼らの語りから読み取れるこれらの同胞意識が「ナナメ」の関係として存在していると想定された。

5. 主要引用文献

安藤寿康・天羽幸子・託摩武俊 (2001) 日本人のふたご観 ふたごの研究—これまでとこれからと— ブレーン出版

磯崎三喜年 (2019) きょうだい関係とは何か—個別性と関係性を探る—子ども社会研究 25 子供社会の窓

三木安正 天羽幸子 (1956) 兄的性格・弟的性格と双生児における兄弟的扱いについて 東京大学教育学部紀要 1 巻 60-70

三木安正 天羽幸子 (1969) 双生児の見られる兄弟的性格差異と家庭での取り扱い方—双生児研究その2— 教育心理学研究 第2巻 第3号 13-21,62

三木安正・波多野誼余夫・久原恵子・井上早苗・江口恵子 (1963) 双生児による人格形成の研究：I 教育心理学研究 第11巻 第3号 142—151,186

三木安正・波多野誼余夫・久原恵子・井上早苗・江口恵子 (1964) 双生児による人格形成の研究：II 双生児の対人関係の発達 教育心理学研究 第12巻 第1号 1-11,59

早川考子・依田明 (1983) 横浜国立大学教育紀要

依田明 (1990) きょうだい関係の研究 大日本図書

依田明 (1965) きょうだいの性構成ときょうだい関係 教育心理学会 第7回総会発表論文集

Dunn, J. & Munn, P. (1986) Siblings and the development of prosocial behavior.

International Journal of Behavior Development, , 265—284.

Festinger, L (1954) A theory of social comparison processes Human Relations 7 117-140

Zazzo, R. Les jumeaux le couple et la persomme. Paris Presses Univer. France.

(1960)